
地下世界-アンダーグラウンド-

さすとなる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地下世界・アンダーグラウンド・

【Zコード】

Z8107L

【作者名】

さすとなる

【あらすじ】

僕が暮らす世界。

それは太陽の無い、月だけの世界。
明るいけれど、荒れています。

それが僕の全て。

ある日の僕

僕が暮らしてこないこの世界は、どうやら普通の世界じゃないらしい。それを知ったのはまだまだ本当に子供だった時だ。

外の、本当の世界には『タイヨウ（太陽）』といつものがあつて、それが世界を照らし朝を教えるのだという。

僕は太陽なんてものは見たことない。見たいとも思わない。見たことない理由っていうのは、ココがその太陽のある世界の下に存在しているから。

見たいとも思わない理由っていうのは、僕は今いる世界で満足しているから。

月しかないけれどそれなりにこの世界は明るい。

この月も作りものだけど、電球だけで出来るんだって聞いたことがある。

とにかく、僕はこの世界で満足してる。

地上世界、地下世界。
オーバーワールド アンダーグラウンド

2つの世界はその名前の通り、地上とその下に存在する。人によつては、太陽世界・月世界なんて呼んでるかな。どつちが正しいとかそういうのはないけど、若い人はほとんど前者で呼んでるからな……。

ちなみに僕もそつちで呼んでる。だって呼びやすいじゃん。

「おい！何一人で考え込んでるんだよ、飲み終わつたなら帰つて」

「……僕にだけ冷たいよね、李音^{りおん}つて」

「つねせい、いつまでもそこに座つていられると邪魔なの」「いつまでも居座つちゃおうつと」

今僕の目の前に立つて僕を怒鳴りつけてる相手の名前は李音^{りおん}。

このギルドの中にあるカフェで働いているギルド加入者で、喧嘩の強い23歳。

どうしてだか、僕にだけはこんな風に冷たいんだ。

まあ、気にしないからいいんだけどね。

「 言つておくけどさ、僕はあんたらの情報源でカフェのお客様だか

「 ら

ちょっと勝ち誇った感じでいうと容赦なく睨まれました……。

まあ、こうこう反応してくれるからいつもからかうんだけどね。

「 あ、ところでさ秋澄あきすみ? また何かトラブル起こしたろ。表に10人ぐらい来てるよ」

「 うげ、やだなーもつ……適当にあしらうとこでくれない? お金なら払うからさ」

秋澄あきすみってのは僕の名前。

僕が地下世界でやつてるのは情報屋で、人の個人情報とかも掴むことがあるからトラブルも多いんだよ。

んで、そういう時は李音りおを雇つて、戦つてもうことが多いんだ。お金出さなきゃ戦つてくれないんだけどさ、ケチだよね… そういうところは。

「 ……こへり出す?」

「 さあ? 相手が僕のところに来なければ嬉しいけど」

そうしてしばらく睨み合つてたんだけど、僕がちゃんとお金を払うこと知つてる李音りおは静かに扉に向かった。

扉の方では鍵が掛かっているからか、イラついているからかわからないけど、強くたたく音が聞こえてくる。

扉の前に立つた李音りおは右足をゆっくりと持ち上げて、蹴りの体制を作る。

それを見たギルドのメンバーははやし立てるよつよつ盛り上がりにつきてきた。

李音りおの喧嘩けんかは見てて面白いからギルド内でも人気あるみたいだ。僕がそんなことを考えてたら、李音りおの足が動いて扉が蹴り飛ばされた。

向ひの側からの攻撃には堪えていた扉が大きく悲鳴をあげて吹っ飛

ばされる。

あれは……向こう側の人無事なのか少し心配になるかな……。
相手は僕を殺しに来てるだろうから、心配する必要はないんだけど。
……つていうかもしかしなくとも、あの扉の修理代つて僕持ち?
メンバーの視線が僕に集まってるから僕が払うことになりそうだね、
うん。

「すいません、ギルドに何が用でしょつか?あんなに強く扉をたたくなんて、……扉が壊れたらどうするんですか」

「え、いや……その……」

「お、俺たちは……」

自分たちがどんなに強くたたいても壊れなかつた扉が、あつせりと蹴り飛ばされただろう状況を見て男たちは口ごもる。

あ、なんで『だろつ』のかつていうと、扉は吹っ飛んできた。
吹つ飛んだ扉の向こう側にいたのは、足が正面に伸びている少年が立つてているから。

足が自分たちの方に向いて振りぬかれていたら、誰だつて思つですよ?

「ああ、この少年はこの扉を蹴り飛ばしたんだ」つて。

……つていうか今自分で扉壊したよね?

なんか言つてることおかしくなつちゃつてるよ。

「まあ、君達の用つていうのは情報屋の秋澄関係でしょう。それを見越したうえで言いますね。帰つてください、そしてもう一度と秋澄を追いかけないでください」

口を開けてポカンとしている男たちにそれだけ言つと、李音は扉を拾うために外へ出る。

外に出る瞬間にこつちをちらつと見たつことは、扉の修理代払えよつて意味だと思つ。思いたくないけど。
もちろん、覚悟を決めてギルドまで來てるそつらは、それくらい

のことで諦めるわけにはいかないみたいで。

「ま、待て！俺たちは帰るわけにはいかないんだ。あいつを捕まえてボスの前に引きずり出さなきゃならないんだよ！」

「そっ、そうだそうだ！あの情報屋を出せ！」

李音はふうっと小さくため息をつくと、一瞬見る。

やだなあ、そんな目で見ないでよ……。

僕が雇つてることもろバレしてるじゃん。

じーっと僕の方を見ている李音に、しうががないから合図を送る。

そうして男たちはボコボコにされ、うめきながら、一部は泣きながら帰つて行つたのだつた。

あ、もちろん修理代は僕が払いました。

だって、全員で詰め寄つてくるんだもん。

李音が蹴り飛ばしたんであつて、僕じゃないっていうの……。

物語の始まりは突然に

それはいつもの日常のようで、けれど何かが違う気がしていた。そんな不思議な気持ちを感じながら、いつものようにギルドに行こうと家を出た。

あ、地下世界の家アンダーグラウンドって、普通はトタンで出来てるんだけど、僕の家はレンガで出来ている。

地上世界の家は鉄で出来るって昨日初めて聞いたんだけどね。

とにかく僕はギルドに向かって大通りを歩いていた。

そつとしてみんなに声を掛けられながら大通りを歩いていたんだけど……。

突然後ろから襟を捕まれて引っ張られたんだ。
それをやつた人は、この間、ギルドの前で李音りおんにぼこぼこされた男の一人……だったと思う。

「ようやく見つけたぞ！情報屋じょうほうやあー！」の前はよくもやつてくれやがつたな」

「それやつたの僕じゃないでしょ！？」ギルドの人じゃんか

「お前が雇つたんだろ！調べ上げたぞ。この野郎！」

！マーク多いな、この人。

なんて現実逃避してゐる場合じゃないで！

僕は喧嘩が死ぬほど弱いんだよ。いや本当に。

さて、と。どうやって逃げよう……諦めるしかないかな……。

いや、でも諦めたらきっと殺されちゃうよ。

まだ死にたくないよ、やり残したことだつてたくさんあるのに……。

僕がそんなことを考えて現実逃避らしきものをしていた時、僕の襟首を捕まえていた手の力が緩む。

いくら喧嘩が弱くてもその瞬間を僕が無様に逃がすはずもなく、何とか脱出成功。

でも、どうなったんだろう？誰かが助けてくれたのかな？

「『じつ、『ごめんなさい！』」

「てめえ、ぶつかってんじゃねえよーおかげで手を離しちまつたじやねえか

そう言いながら僕の襟首をむつ一度掴まないでくれるといいんだけどな。

襟首を捕まれた状態で後ろをゆづくつと振り返ると、そこには僕と似た顔の少年がいた。

「え……？」

いや、似た顔なんてものじゃない、……全く同じだ。

髪と瞳、そして肌の色以外は。

これらが違うだけで印象つてとても変わること、それでも僕には分かる。

髪は僕の方が長い、身長も僕の方が高い。

けれどその髪、瞳の色は、きっと僕が持つて生まれるはずだったもの……。

「あ、あの……何か……？」

おつと…どうやら考え込んでいる間ずっと彼を見つめていたらしい。彼は怯えた様子で僕を上目遣いで見ていた。

「う、ううん。なんでもないよ…ただ、ちょっと……」

彼はやっぱり気付かなかつたらしい。

……ん？あれ、そういうえばいつの間にか男の手から解放されてるようだ。

「こんなとこりで何やつてるの？秋澄。^{あきすみ}……そつちの秋澄にそつく

りな少年は誰？」

と思つたら、どうやら李音^{じおん}が来ていたらしい。まあ、派手に騒いでたしね。

男は、とそちらを見るとお腹を抱えて地面につづくまっていた。

少年は突然の乱入者に驚いて固まつてた。驚いてばかりだな。

「知らない。そつちでうずくまつてた男にぶつかってきただけだか

「ひ

「……声、思いつきあり震えてるけど」

「ひ

出来る限り声が震えないように口元をつけたつもりだけだが、震えてしまつたらしい。

え？そりや動搖もするよ。僕は自分の生まれはよく知つてゐつもりだから。

自分の家族が地上世界オーバーワールドにいることや僕自身が捨てられたってことも。

「とりあえず……秋澄あきすみ、ギルドに来るよな？貴方も来てくれますよ

ね

「えつと、……はい、行きます」

僕の身の上話、聞きたい？

あの後、すぐにギルドに行って、話することにしたんだけど……。その前に僕の身の上話を聞いて欲しいんだ。

きっとその方がみんなに理解してもらいややすくなると思うから。とにかく、聞いてくれると嬉しい、かな。僕が調べ上げた、僕自身の生まれを。

僕は地上世界オーバーワールドの名家に生まれた。

あの少年……宮みやとは双子で、僕が長男おしゃくだつたんだ。だけど、僕はアルビノオーバーワールドっていう生まれつきの病気びょうきで、後継ぎにはなれなかつた。

アルビノっていうのは、先天性白皮症・先天性色素欠乏症せんてんせいけいそくけつかいしやうともいわれる病気。

要は、体中の色素が少なくて、髪の毛とかは白で眼は血管が浮き彫りになつて赤く見えるんだ。

僕は白髪に赤眼あかまなこっていう不思議な容姿ようすをしてるつてこと。それだけなら珍しい容姿だね、で済むんだけどね。

そう、それだけじゃないんだよ、アルビノオーバーワールドっていうのは。

太陽から体を守つているのは色素。

んで、その色素が少ない僕は太陽の光にあたると結構大変なことになつちゃうんだ。

太陽のある地上世界オーバーワールドに出ると、僕はまともに世界を見ることが出来なくなる。

その他にもいろいろ困ることがあるんだけどそれはもう、言わなくていいかな。

僕の家は裕福で、僕はその後継ぎのはずだった。

でも、その僕はアルビノで、太陽のある世界では生きていけない。家にとつてもそんな僕は必要なかつたから。

だから、太陽の無い世界に……地下世界アンダーグラウンドに僕を捨てた。

死んでもおかしくなかつたはずだけど、捨て子を拾つては育てていた不思議なおじいさんに助けられてさ。そのおかげで、今僕は生きてるし、李音りじおとも知り合あいになれた。……あんまり、話したくないな。こつこつのつて。なんて言うのかな、性に合わないつていうか……。まあ、とにかく！

僕と富は双子で、僕は地上に戻れないみやつてこと。

……でも、どうして富は地下世界アンダーグラウンドに来たんだろう？

僕を捨てたような家だから、僕の存在を富に教えるわけもないし、そもそも僕が生まれたつて記録すら消してしまいそうなのに。

「じゃあ、君は自分の名前すら覚えてないわけですね？」
「ヤだなあ……、何でこんな事になつてるんだろう……？」

「ごめんなさい……」
上から順に李音りじお、秋澄あきすみ、富みや。

あ、僕の名前覚えてくれてる？僕は秋澄あきすみだよー、忘れないでね。ギルドは初めて來た人が、僕や李音りじおと知り合あいだつてことが珍しいみたい。

さつきからずつと視線を感じてるんだよね。本当にうつとうしぃいや。

「秋澄あきすみ、この子の名前知つてるのか？」

李音りじおがあからさまに周りをにらんで視線を散らすと、僕に聞く。もちろん知つてるさ、知りたくなかったことまでね。でもそれは言いたくないことなので言わない。

「…………富みや」

「私の名前つて富つていうんですか」

「それじゃあ、富君。君が記憶を失っているっていうことは、君は住むところもないってことですよね」

そう一息に言って僕を見る李音の真意は分かる。

だけどそれだけは絶対に嫌だ。何があつても嫌だ。

僕が富を引き取つて暮らし始めたなら、僕はきっとこの子に辛く当たつてしまつ。

……憎んでしまつ。だから無言で首を振る。

李音は軽く溜息をつくと、

「それなら富には、ギルドで手伝いをもらいます。その代わり、ギルドの所持する住居を貸してあげましょう。見たところ、自分の記憶を失っているだけで、常識まで失っているわけではないですから、日常生活に問題はないでしょ？」

かくして、富はギルドの提供した住居に住むことになり、その間、ギルドの手伝いすることになった。
富の住居が僕の家に近くて、僕が李音に文句をぶつけたのは当然のことである。

まあ、それは余談だつて事で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8107/>

地下世界-アンダーグラウンド-

2010年10月10日02時49分発行